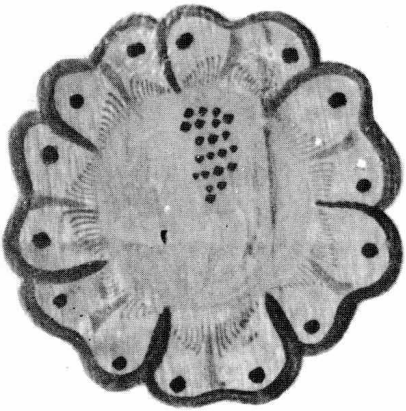
২

青葉しげれる・も変らず

安岡章太郎全集 Ⅳ



安岡章太郎全集 Ⅳ
青葉しげれる・相も変らず
昭和四六年四月二〇日 第一刷発行

著 者 安岡章太郎
発行者 野間省一
発行所 株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号 一一二
電話（九四五）一一一一（大代表）振替東京三九三〇
印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 藤沢製本株式会社
定 価 一二〇〇円
© Shotaro Yasuoka 1971, Printed in Japan
乱丁本落丁本はお取り替えいたします。

0393-135542-2253（0） （文1）

安岡章太郎全集Ⅳ

青葉しげれる・相も変らず

目次

秘密　7
青馬館　25
青髭　69
マルタの嘆き　97
故郷　119
キリザンショ　143
サアカスの馬　173
トリと豪蔵　183
肥つた女　203
松の木のある町で　227

D町のにほひ　255
青葉しげれる　275
一年後　321
相も変らず　355
むし暑い朝　397
解説
悪夢のイメージ　坂上弘　456

装幀＝田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安岡章太郎全集Ⅳ

青葉しげれる・相も変らず

秘
密

その夜、僕は勝閧橋のあたりで、ひどくとりとめもないほど巨大な動物のために、一人の男が殺される場面に遭遇した。

そのとき僕は時刻をみはからつて、このわが国最大のハネ橋のハネ上る光景をみようと思つたのである。かつて、敗戦前のある時期、僕はこのあたりの風景を愛惜した。兵営、工場、都民の胃袋である中央市場、さういつたものが雑然と交りながら、一本の太い、海のやうな河につらぬかれることによつて一つの調和をつくつてゐるとこが好きだつたのである。……で、その調和の支点をなしてゐるこの橋の動くところは多分、僕をいくらか興奮させるだらうと思つたのだ。

橋のたもとの石造の欄干によりかかりながら僕は待つてゐた。あたりはしんとした河面から、重い塩分をふくんだやうな幅の広い風が吹き上げてくる。

しかし橋はどうしても開かなかつた。ことによると機械設備に故障でもあつたのだらうか。橋の番人が懐中電燈をさげて運転小屋から出てきた。そして、ちやうど橋が二つに割れるところで

立ちどまつた。僕のゐるところから最初、そこに何かがうづくまつてゐるやうにみえた。だが、それは懐中電燈の光の輪の中で、かたまりかけたゼリーのやうにユラユラゆれ動きながら膨らみ上つたかと思ふと、どつと番人めがけて流れ出した。そして僕は一瞬、驚ろくべきものをみた。巨大なる蛸である。……考へられもしないほど大きな蛸が、その脚で橋桁をガッシリおさへこんでゐる……、さう見た瞬間、番人の姿は「蛸」のなかに吸ひ込まれ、粘膜につつまれて身動き一つしないうちに、溶け入るやうに暗闇の中に消えてしまつた。僕は走りよらうとした。だが、そのときあの怪物が橋桁から脚をはなしたのか、橋が動きはじめたので、そのまま欄干から首をつき出して河を見下ろした。……しかし、もうあの醜怪なものの姿は水面の下に没してをり、ただ、直径五十メートルほどの渦の中心に、番人の持つてゐた懐中電燈であらうか、青白い光が一点かすかに黒い水の底から光つてみえたが忽ちそれも消え去つた。

しばらくは僕は、その場を動けなかつた。いまは開いてハネ上つた橋が僕の目の前に、道路を壁のやうに遮断して立ちはだかつてゐるが、その橋桁の先端（つまり橋の中央部分）が、半分以上も黒く濡れて光つてゐるところをみれば、あの「蛸」の脚の部分だけでも相当の大きさであることがわかつた。

それ自体が何か茫莫とした巨大な生き物のやうに思はれる黒い河面を見下ろしながら僕は、あの渦の大きさからみても、もしあの動物が陸上へ上つたとしたら、四五十メートルの背丈はある

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だらうかと思ひ、それが街中を歩くところを想像した。そして、――しかしこれは誰にも云へないことだ、と思つた。

・

僕は道を引きかへすと銀座の方へ歩いた。……いやに喉がかわいてゐるな、さう思ひながら、家並みの上に夜空が赤く染まつてゐる方へ向つて足を早めるのは愉快だつた。どの店でもいい、飛び込んだら早速、飲み物を注文しよう。

実をいふと僕はふだんは、この街に何となくなじめなかつた。街の空気全体がピカピカに磨き立てられて、臭ひも温度も拭きとつてあるやうに思はれるからだ。しかし、いまはちがふ。僕は、どこかの柔いところに坐り、喉をうるほす必要を感じてゐる。すくなくともいまは、目の前の街が利用するためにある。さう思ひながら僕はポケットの中に手を入れた。すると、指先から冷いものがつたはつてきた。あわてて手を引つこめようとしながら思ひかへして、ぐつと握りかへす。まるめたままつつこんである紙幣だ。……この金を僕に手渡したのは、ヌカルミの真中に立つた古い木造の建物の中のRといふ役人だ。ぎしぎし音のする木造の階段をのぼつた右のつきあたりの「災害給与係」と黒い札のかかつてゐる部屋。そこには、松葉杖をついた男や、ボロボロの着物に黒い男ものの足袋をはいた母親や、痩せた赤ん坊を材木の切れ端かなにかのやうに背

中にくくりつけた女や、そんな連中が板の腰掛けに並んで坐つてゐる。Rは白い木綿のカーテンを下げた窓のそばのデスクで彼等の差し出す書類を読み、それを戸棚に並んでゐる大きな帳簿や、中央の肱掛け椅子に坐つてゐる上役の眼つきと較べあはせながら、ある金額をはじき出す、したがつて彼は疑惑することが役目だ。垢光りのする黒いセビロや、鼻の上でゆがんでゐる眼鏡や、大きすぎる皮のスリッパなど、身につけたあらゆるものがみな、「おれはウタグッてゐるぞ」といふ信号を誰の眼にもつくやうにかかげてゐる。そして大抵の者が、この男に名前を呼ばれると、自分が嘘をつくためにこの場所へやつてきたのだと思はせられる。僕の前に並んでゐたのは、中から毛皮のハミ出してゐる防水布のフトンに手肢をつけたやうな服をきた丸顔の男だつた。Rは彼の書類に眼をとほすと、呼んで口を開けさせた。

「シベリヤから帰つてきたんだつて？　しかし君の歯がシベリヤで悪くなつたといふ証拠はどこにもないぢやないか。」

「……」男は何か云つた。それが日本語であることには間違ひなかつたが、何を云つてゐるのだか、僕にもRにもサッパリききとれない。

「かういふのは何ともできないよ、いくらシベリヤ帰りだつて。」

まるく膨れ上つた男の顔は赤黒く日焼けしてゐたが、実はその皮膚全体を黒い細かなヒビが薩摩焼の陶器のやうに網の目になつて覆つてゐた。彼は弁明の言葉を補ふために手ぶりや身ぶりを

加へるのだが、ふくらみ上つた衣服のために異様に短くみえる手や脚は、いたづらにゼンマイ仕掛の玩具じみた架空な印象をあたへながら、上つたり下つたりしてゐるばかりなのだ。

「かういふことで、いいかげんな申請書をかくとだな、叱られるのは君ではなく、こつちの方なんだ。」

Rは手まねでシベリヤ帰りの男を追ひはらふと、次に僕を呼んだ。

「……？」

不思議なことにいままで普通にきこえてゐたのに、順番がくると僕は耳がきこえなくなる。しかたなく僕はいつもRの口がパクパク開いたり閉ぢたりするのをみると、目立たない程度の笑顔をつくる。そしてRが僕の書類をながめてゐる間、僕は立つともなく坐るともないある不安の姿勢をつくつて待つ、――活版で印刷されたその書類には、何箇所かの空白があり、そのいくつかに何箇かの架空の数字を書き入れることが僕の仕事なのだ。それはまつたく直感による作業だ。数字を2にするか3にするか、または2300にするかについては何等の根拠がないのだから。――Rはその数字を、帳簿や上役の顔やと引きくらべながら検査し、彼自身の不可思議な計算で解きほぐしながらもう一度組立てる。そしてその数字がなにがしかの金額に換算されるのだが……。

「……？」書類から眼をはなしたRが、また何か云つた。僕は急にシャツのボタンを引きちぎつ

て、その下に着てゐるセルロイドのコルセットの胸を突き出したい衝動にかられながら、顔を上げた。するとRはデスクの引き出しをソソクサとあけて、タバコの袋をとり出し、封を切つて僕の前にさし出した。僕はおどろいた。こんなことは今まで一度もなかつたのだ。しかも、その一本をとつて火を点けると不意にRの声がハッキリ耳に入つてきた。

「じつはですね、この数字はできるだけ多く書いておいてもらひたいのですよ。」

「え?」僕は思はず声を上げ、そして後悔した。いまは「ハイ」とこたへるべきではなかつたのだらうか。

「いいですか。」Rはしづかな声で云つた。「わたしの方はウタグルのが商売ですからね、わたしをもつと多くウタグラせたらどうですか……」

ちやうど昼飯の時刻にあたつてゐるのか、Rのとなりの席の女事務員がコンパクトをパチリと閉ぢると、書類入れの金網の籠を火鉢にかけてそれにベントウ箱を乗せた。するとコンブの焦げるやうな臭ひが僕の鼻を撲ち、あちこちの火鉢で同じことがはじめられてゐるのだ。

「はア、しかし……」僕は、おそるおそる指をのばした。「たとへば、この2は5にしておきますか?」

「……!」Rは眼鏡のおくから僕の顔を見つめた。しかしその力のこもつた瞳のために、僕の耳はまたしても聞えなくなつた。Rは机の上の黒い手提金庫の中から紙幣を取り出して僕の手にに

ぎらせた。……それは毎月行はれてゐるとほりのことだ。しかし、さつきベントウを書類入れの金網で火にかけてゐた女がジッとその手を見てゐるのに気づくと、心臓が急に固いコルセットの下で動悸を打ちはじめ、背を向けるのが恐ろしさに、お辞儀をくりかへしながら後ずさりで部屋を出た。

耳の中に、

「さつきのこと、誰にも云つてはなりませんよ。」といふRの声のひびくのを感じながら。

僕はいつか銀座に向つてゐた足を暗い横道にそらしてゐた。手はポケットの中の湿ッぽい紙幣をにぎりしめながら、古い堀割にそつて歩いてゐた。

堀割は橋の近くになると、その片側の半分以上もゴミと汚物でうづめられてをり、傾きかけた背の低い食ひ物店がせまい地面にギッシリ軒を並べながら、そろつて一間ほど堀割の上にノリ出してゐる。そこはおそらく調理場か何かになつてゐるのであらう、裸の尻をつき出して糞をしてゐるみたいに、それぞれ野菜の切り屑や果物の皮を落したり、水をジャアジャアたらしたりしてゐた。……依然として僕は喉がかわいてゐた。しかし、どこの店に入る気も起らなかつた。別段、不潔さを怖れてゐるのではない。もつと小ギレイな店にしたつて、それは同じことなのだ。

濡れたやうな光を道路まであふれ出させてゐる喫茶店の前に立ちどまつて、入らうとすると突然、弾力のあるガラス板が僕の前に立ちふさがつてしまふ。突進して入らうとすると、僕の体はイキナリ内部からひどく鞭うたれたやうにシビレはじめるのだ。

橋の上に、浮浪人が立つてゐる。腕にだらりとうす黄色いモモヒキをたらしながら、近よると僕に差し出した。

「いくらだ」と、以前ならば訊いてみたにちがひない。物の値段をしらべることに僕は興味をもつてゐた。米、小麦粉、サッカリン、アスピリン、紙、そんなものの価格は植物のやうに季節の変化をしめしてゐたから……。

だが、いま僕にはさういつた興味がまるでなかつた。店といふ店からあふれ出して鋪道の上にまで振つた商品、街すぢいつぱいに曝された食物、衣料、雑多な器具や小動物にいたるまで、あらゆるものが僕から遠い。白く粉をふいた黒い肌をふるはせて立つてゐるゴム長靴、埃つぽいラシャ地の上にウジャウジャとでたらめに置かれながら同じ時刻に針を指してうごいてゐる時計の山、そのとなりには、魚の卵、タクワン、樽の中にぶつぶつ泡をふいて澱むイカのハラワタ、……そんなものに僕は蹴つまづきさうになるのだが、何ひとつ僕に呼びかけてはこない。乱雑に無秩序のままかたまりこんで冷く僕を見かへすばかりだ。

僕は歩いた。周囲が僕に無関心であればある程、執拗に何かのひつかかりを求めて歩きつづけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com